

# 大震災－何が起きたのか、どう再生すべきか？ この1冊です！！

## 自治体職員の経験を持つ二人が、現場感覚でつづる3章

<p>Ⅲ 「復興へのみちすじをえがく」 池上洋通</p>	<p>Ⅱ 「明らかになった防災上の問題と自治体防災の方向性」中村八郎</p>	<p>Ⅰ ルポ「破壊されたのは人生そのものだった」 池上洋通</p>
<p>被害が集中した東北の地には、積み上げられてきた地域の産業と地域の文化、特色を持つ地域社会がありました。「上から」の復興計画は、これらをすべて無視しようとしています。</p> <p>それに対して市町村から、住民生活と地域産業の「復旧」を第一にしたプランが出され、「脱原発」への道がひらかれようとしています。</p> <p>被災を基本的人権の問題としてとらえ、切実な願いに応える復興への道すじを描きます。</p> <p><b>東京都日野市の職員として総合政策の立案などにたずさわり、実践的な政策理論で全国各地の地方自治体の現場に提言を続けてきた筆者が、率直に語ります。</b></p>	<p>今回の災害では、私も身内が二人亡くなり、先日遺体が見つかったというような状況です。どうも日本の防災対策は基本的に間違っている：そのことが明らかになったのではないかと考えています。そこで急いでキューバに調査に行き、厳しい状況のなかで国民を大切にする防災対策を目の当たりにしてきました。</p> <p>自治体は、それぞれの地域ごとの、最大被害を前提に計画を組み立てるべきです。</p> <p><b>東京都国分寺市の防災担当職員として、第一線の防災事務の経験を持ち、全国の防災政策をリードしてきた筆者が、自治体の防災対策のあり方を、具体的に語ります。</b></p>	<p>目の前に広がるのは、まさに息をのむ光景であつた。</p> <p>土台から引きはがされた家屋が幽霊のように立ち、流されてきたタンスの引き出しが開いていて、中の衣料が見えたりする。地震に揺さぶられ、津波に流されて破壊されたのは、人々の日常生活そのものであつた。そして数多くの生命がさらわれ、消えた。</p> <p><b>大震災から一カ月後、福島県の被災地を歩き、災害の実態を調べ、人々の悲しみと嘆き、怒りにふれ、自治体の長や議員たちの声に耳をかたむけた迫真のルポルタージュ。</b></p>

●池上洋通(いけがみひろみち)1941年静岡県生まれ。自治体問題研究所主任研究員、NPO法人 多摩住民自治研究所研究員室長 NPO法人日野・市民自治研究所理事。日本ジャーナリスト会議会員。著書に『人間の顔をしたまちをどうつくるか』ほか。

●中村八郎(なかむらはちろう)1946年長野県生まれ。日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。NPO法人 ぐらしの安全安心サポーター理事長。日本大学理工学部・大学院非常勤講師。著書に『防災コミュニティ』(共著)ほか。

### 『大震災 復興へのみちすじ』 注文票

ご氏名	
ご住所・お電話	〒
冊数	冊

